

「ではないか」と「のではないか」の認知論的な比較 — 「の」の有無を中心に—

高 甜

A Comparison of “dehanaika” and “nodehanaika” from the perspective of cognition -Focusing on the presence or absence of “no”-

GAO TIAN

Abstract

Foreign learners of Japanese often confuse the negative question form "dehanaika" with "nodehanaika", even if they are at an advanced level of Japanese.

In this paper, the author applies the idea of prototype, then hypothesizes "dehanaika" and "nodehanaika" constructions differentiated by the duality of uncertainty. And through a case study, the author clarifies the continuous transition and explains the difference between "dehanaika" and "nodehanaika" in the cognitive factors.

In chapter 1, the author lists some matters concerning "dehanaika" and "nodehanaika" constructions from the perspective of Japanese language learners. In chapter 2, the author reviews previous studies, then in chapter 3, with the example sentences compared and analyzed, the author illustrates the distinction between the "dehanaika" and "nodehanaika" in terms of the duality of uncertainty. After investigating the role of "no" in chapter 4, the author clarifies the specific meaning function and prototype meaning of the "nodehanaika" construction. In chapter 5 the author clarifies the specific and prototype meanings of the "dehanaika" construction, and provides a rational explanation of the continuity between the "dehanaika" and "nodehanaika" constructions. Finally, in chapter 6, implications of this study are summarized and some tasks worth future studying are set.



目次

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. はじめに <ul style="list-style-type: none"> 1.1. 問題の所在 1.2. 研究仮説 2. 先行研究 <ul style="list-style-type: none"> 2.1. 「(の) ではないか」構文 2.2. 「のだ」文 2.3. 習得研究と学習者の視点から見た問題点 3. 「ではないか」と「のではないか」との使い分け <ul style="list-style-type: none"> 3.1. 不確かさの二元性 3.2. 確度の差による使い分け 4. 「のではないか」の意味機能とプロトタイプ <ul style="list-style-type: none"> 4.1. 「のではないか」の意味機能 | <ul style="list-style-type: none"> 4.2. 対比と不確かさ 4.3. 「の」の性質と「のではないか」のプロトタイプ 5. 「ではないか」の意味機能とプロトタイプ <ul style="list-style-type: none"> 5.1. 「ではないか」の意味機能 5.2. 「か」の二面性と「ではないか」のプロトタイプ 5.3. 「ではないか」と「のではないか」の連続性のあり方 6. 終わりに <ul style="list-style-type: none"> 6.1. 結論 6.2. 今後の課題 |
|---|--|

1. はじめに

1.1. 問題の所在

日本語学習者として日本語の文章や日本の番組を見る時、「(の) ではないか」という否定疑問形式をよく見聞きにするが、それらをどのように理解するか、またどんな場面でどのように使うかということによく困惑を覚えている。例えば、

- (1) a. 「(チラシのキャッチフレーズ) いつ行くの」
「今じゃん」 (Yahoo!JAPAN)

- b. 「(CM フレーズ) 今なんじゃないか」
(Yahoo!JAPAN)

- (2) a. みぎわ：何ってことしてくれたよ。私の服に水がかかったじゃないの。ここよ。

まる子：ごめん、悪かった。

『恋するみぎわさん』

- b. お婆さん：一言ぐらいご挨拶いただいても良かったんじゃないの。

桜庭：あの、すみません。

『5時から9時まで』第3話

がある。(1) のように同じ言葉である「今」に「で

はないか」と「のではないか」両方が後続することもあるし、(2) のように同じ場面で両方が使われるケースも少なくない。このように、どんな時に「ではないか」を使うか、どんな時に「のではないか」を使うか分からなくなってきた。

そして、一連の研究の端緒に当たる〔田野村忠温, 1988〕には以下の例、

- (3) a. 「よう、山田じゃないか」
b. 「(不審の様子から) どうもあの男犯人じゃないか」

がある。共に「ではないか」を使っているが、a のように目の前の発見を表す断定的な表現として使う一方、b のように不確かな推量表現として使うこともできる。しかし、なぜこの著しい違いがあるかについては、〔田野村忠温, 1988〕以来の研究は答えてくれなかった。

「ではないか」と「のではないか」はどのように使い分けられるのか、それぞれどんな意味を表すのかということが本稿で提起する問題点である。さらに、「(の) ではないか」構文における言語中立的な概念説明がないため、日本語母語話者のような語感を持たな

い外国人日本語学習にとって、どのような条件が「の」の付加を決め、「の」のつく文と「の」のない文が表す意味がどのように変わるかを明らかにし、合理的に理解することのできる規則として日本語母語話者の運用メカニズムを明らかにする必要がある。

本稿の狙いは、否定疑問形式である「ではないか」と「のではないか」構文それぞれの具体的な意味機能とプロトタイプ的な意味を明らかにした上で、「の」の有無による両者の使い分けの合理的な理由を明示することである。その成果に基づき、日本語教育において否定疑問文の習得効果を高めることができれば幸いである。

1.2. 研究仮説

本稿では、プロトタイプ（[日本語文法学会編, 2014]: 548～549頁）の考え方を「(の) ではないか」構文に適用し、不確かさの二元性（3.1で述べる）が分化した構文であることを前提に、用例分析を通じ、「ではないか」と「のではないか」は、明快な二分関係ではなく、連続的な推移関係であることを示す。

筆者はコーパスや身近にある用例（テレビドラマ、広告、看板など）を利用して、「ではないか」構文と「のではないか」構文を収集した。それらを手作業で一つずつ分析して具体的な意味機能を確認する。収集したデータに基づいて、不確かさの二元性の観点から「の」の有無と「の（だ）」の意味と関連付けながら「のではないか」を考察する。

以下では、2章で先行研究を概観したのち、3章で不確かさの二元性の観点から「ではないか」構文と「のではないか」構文を比較しながら、両者の使い分けを考察する。4章で「の」の役割を検討した上、「のではないか」構文の具体的な意味機能とプロトタイプ的な意味を明らかにする。5章で、「ではないか」構文の具体的な意味機能とプロトタイプ的な意味を明らかにした上、「ではないか」と「のではないか」両者の連続性のあり方を説明する。6章で、本稿の結論をまとめた上で今後の課題を示す。

2. 先行研究

2.1. 「(の) ではないか」構文

[田野村忠温, 1988] は「ではないか」型の否定疑問文を三つに分類した。「ではないか1」は発見した事態を驚きなどの感情を込めて表現したり、ある事態を相手に認識させよう to 求めたりする。「ではないか2」は推定を表す。「ではないか3」は否定辞「ない」の本来の性格を発揮する、いわゆる分析的な表現である。この点において「ではないか1」と「ではないか2」と異なる³。ただし、[田野村忠温, 1988]の研究において、「ではないか」と「のではないか」の二つの形式が区別されず、同一の「ではないか」で示し、両者が絡んでいるように見える。

[蓮沼昭子, 1993] は「ではないか」の固有の用法として、「発見の驚き」、「話し手の評価」、「伝聞情報の確認」、「意思決定・勧誘の表明」のように四つに分けて挙げた。

[安達太郎, 1999] は「ではないか」の基本的な機能を、聞き手の知識の活性化として捉えるが、「のではないか」の中心的な機能を、話し手が見込みを持って相手に尋ねることにあると提案した。また「のではないか」は認識的モダリティに近い表現であると指摘した。

[庵功雄, 2013] では、「のではないか」は「のだ+（確認を表す）ではないか」と見なせるという見解を述べた。それと関連して、[戴宝玉, 2015] では、推量を表す「のではないか」は「のだ」の基本的な性質を有する点で、推量を表す「ではないか」と区別されるべきだと述べた。「のではないか」構文は「のだ」と関連していることを認める点において[庵功雄, 2013]と共通している。

2.2. 「のだ」文

「のだ」文に関する研究は多く行われてきたが、文法レベルから、談話・テキスト文法レベル、さらに語用論レベルまで、いくつかの説に分かれていて、まだ統一的な説明に至っていない。以下いくつかの代

表的な説を年代順に見ていく。

まず、〔三上章, 1953〕: 239 頁) をはじめとする既成命題説がある。「何々スル, シタ」を既成命題とし、それに話し手の主観的責任の準詞部分「ノ」を添えることによって、ある反省的な距離が生じる。だから、単なる報告でなく解説の調子が出てくる。

そして、〔田野村忠温, 1990〕に代表される説明説もなされてきた。「のだ」の基本的な意味機能は、「事柄の背後の事情を表す」と「ある実情を表す」ことであると指摘した(以下の(4)と(5)を参照)。また、〔益岡隆志, 1991〕は「のだ」, 「わけだ」に「ものだ」, 「ということだ」を加え、説明のモダリティを構築した。

- (4) 「今日は休みます。体調が悪いんです」

(田野村 1990 : 5 頁)

- (5) 「僕、大きくなったらパイロットになるんだ」

(田野村 1990 : 7 頁)

そして、〔野田春美, 1997〕がスコープ・ムードの「のだ」を提案した。スコープの「の(だ)」は、文の一部を名詞化するという構文的な理由で必要とされるものである。ムードの「の(だ)」は、文を名詞文に準ずる形にすることによって、話し手の心的態度を表すものである。そして、「関係づけ・非関係づけ」と「対人的・対事的」を2つの軸として四つに分類した。

- (6) 「私悲しいから泣いたのではない。嬉しくて泣いたのよ」(スコープ) (野田 1997: 32 頁)

- (7) 「山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ」(関係づけ・対事的)

- (8) 「そうか、このスイッチを押すんだ」(非関係づけ・対事的)

- (9) 「僕、明日は来ないよ。用事があるんだ」(関係づけ・対人的)

- (10) 「このスイッチを押すんだ」(非関係づけ・対人的) (野田 1997 : 67 頁)

さらに、〔名嶋義直, 2007〕は関連性理論を基礎とする関連性説を打ち出した。「のだ」文は、「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ意図明示的に」「聞き手に対して提示する」という意味として考察した。

2.3. 習得研究と学習者の視点から見た問題点

〔家村伸子, 1997〕では、中国人日本語学習者はレベルを問わず、非分析的な否定疑問文が習得しにくいこと、また上級に至っても「ではないか」と「のではないか」との混同がよく見られることを明らかにした。〔範夢婕, 2015〕の調査では、中国人日本語学習者は「ではないか」の前の「の」の有無が把握しにくいと示した。

上述した先行研究の問題点を、特に日本語学習者の視点から三点にまとめる。第一に、「の」の有無を無視して「ではないか」と「のではないか」を区別せず、同一の文型である「ではないか」として説明するのは、学習者に混乱を招きやすい。また区別されても、「のだ」と関連づけて説明するものが少ないようである。第二に、意味の違いは文形式の違いだけ(上接部が体言か用言か)に関連するという解釈には限界がある。連続的な意味、或いは交差する意味の説明ができないからである。第三に、「聞き手の知識の活性化」や「傾き」や「関係づけ・非関係づけ」などの概念語は、言語中立的ではなく、非日本語母語話者への日本語教育用語として理解が難しい。

本稿は上述の問題点の解明を目的として、「ではないか」と「のではないか」を区分し、それぞれの表現特徴を個別言語に依存しない概念語で合理的に記述する。さらに「のだ」と関連づけながら「(の)ではないか」構文を考察することも考慮に入れる。

3. 「ではないか」と「のではないか」との 使い分け

3.1. 不確かさの二元性

事態とされる出来事について、出来事が起こることと出来事が起こらないことの間には、出来事が起こる確からしさの程度がある。数学分野では確率の概念で捉えられている。既に400年も前から確率の概念には二元性があることが指摘されていて、一つは、繰り返しの長期試行に見られる安定した頻度を表すもの（偶然に依拠する側面）で、もう一つはある事実について個人の知識やその事実を支持する証拠に対する信念の度合い（認識論的側面）である（[イアン・ハッキング著、広田すみれ・元良太訳、2013]:21頁～22頁）。確率論の中で、前者は頻度主義と呼ばれ、後者はベイズ主義と呼ばれている（[エリオット・ソーバー著、松王政浩訳、2012]）。

本稿では、事態が起こる確からしさの程度を「確度」と称し、「の」は上述の後者の解釈、つまり事態の認識に対する概念化を通じて表そうとする形態表示であると考え。「の」でマークされる事態は話し手の認識に基づいて起こる。「のではないか」は、その事態についての知識や、事態の生起を支持する証拠に対する信念の不確かさが概念化された言語表現であると考え。

以下では、この提案仮説を、実際の例文を挙げて分析し、検証してゆく。

3.2. 確度の差による使い分け

文が表す意味が確定な物事かそれとも不確定な物事かによって、「ではないか」と「のではないか」との使い分けが弁別できる。以下に例文を示しながら見ていく。

(11) まる子：湖綺麗だね

お爺さん：湖？

まる子：ほら、目の前にあるじゃん。

『まる子、別荘への憧れ』

(12) まる子：もしもね、もしも（アマリリスを）見つけたとしたら、どうやって捕まえるの？

山根：決まってるじゃないか。抱っこするのさ。

『みぎわの犬』

(13) 玉子：あの犬大きいんだよね。すごく。

まる子：私たちより大きいね。

玉子：それはちょっと怖いかな。

まる子：でも大きい犬って優しいって言うじゃん。

玉子：そうだね、ギャンギャン吠えないしね。

『みぎわの犬』

(11) は目の前のこと、(12) は見に見えないが話し手にすでにわかりきったこと、(13) は「大きい犬は優しい」ということを共有認識として提示するのに言及する際に「ではないか」文を使う。即ち確定している文脈において「ではないか」がよく使われている。そこから「ではないか」の確度が高いことが伺える。

一方、(14) (15) は何の根拠もなく、まったく分からないことについて、「のではないか」を使って「まだ帰っていない」、「学校では言えないこと」だと自分の不確かな判断を述べた。そこで、「のではないか」の確度が低いことが読み取れる。

(14) 姉：お母さん、まる子は？

母：さあまだ帰ってないんじゃない。

『まる子賞状をもらう』

(15) まる子：手紙？誰から？

母：同じクラスの藤木くんから、ほら。

まる子：藤木が？なんでわざわざ手紙なんかくれるんだろう。

母：（笑いながら）学校では言えない事なんじゃないの。

まる子：えー、まさか…（告白？）

『不幸の手紙』

確度の差は、以上のように文の意味論的な特徴によって反映されているほか、構文上にも一定の傾向性が見られる。次に、構文における共起語や文末表現を見ていく。

- (16) (母が健康手帳を見ながら)「しっかり食べないから、今日の健康診断で、全然体重増えないじゃないか」 『まる子, 偏食をする』

- (17)「山根、あんたも随分ひどいじゃないの」
(2015 381 話)

- (18)「あいつ千歳飴なんかくれたりして、結構可愛いじゃないの」 『いとこの七五三』

- (19)「アジアモーターショーなんて超でかい仕事じゃないですか」
『ウチの夫は仕事ができない』第10話

例(16)(17)(18)(19)の「ではないか」を使った文においては、それぞれ「全然」、「随分」、「結構」といった程度が高いことを表す副詞、程度が極端であることを表す接頭辞「超」と共起している。それは話し手の発話時における意思判断の確度が高いことに繋がっていると考えられる。

一方、次の(20)(21)(22)の「のではないか」文においては、程度が低いことを表す「ちょっと」、「少し」、「だいたい」といった副詞が使われている。

- (20) (観光地とは言え 800 円のうどんは高すぎ!)
「ちょっと高いんじゃないの」 (Yahoo!JAPAN)

- (21)「この見積もり少し高いんじゃないの」
(Yahoo!JAPAN)

- (22) 竹村：私の取り調べはどうだった?
相原：だいたいいいんじゃないか。
『正義のセ』第1話

また、下にある(23)(24)のように、後ろに「～でしょうか」、「～かな」など語気をさらに柔らかくしたり、不確定なことを表したりする文末調整もしばしば見られる。これらの共起語と文末調整は、話し手の発話時における意思判断の確度が低いことを暗示すると考えられる。

- (23)「李さんなら、小野さんとお茶でも飲みに行っ
たんじゃないでしょうか」

『標準日本語 初級下』P150

- (24)「もしかしたら君は空を飛ぶんじゃないかな。」
(Yahoo!JAPAN)

以上、「ではないか」と「のではないか」は確度の差によって使い分けられることを明らかにした。

しかし、意味上にも構文上にも、「ではないか」文と「のではないか」文における確度の差が常にはっきりしているわけではない。どちらを使うかに揺れがある場合も少なくない。例えば、

- (25) 石塚さん、もう一度お聞きます。葛西さんに自作の曲を提供し、いわゆるゴーストライターの一人になられたんじゃないありませんか。(じゃありませんか) 『リーガル・ハイ』第2話

- (26) 凜華：でも終わりじゃないの。日本でもコンサートがある。次のコンサートで塔子さんがアッと驚くような完璧な演奏を見せればいいんじゃないの (じゃないの)。下げて上げる作戦だよ。塔子さんちょっと変わってるところがあるからさ、そう言うのに、グッとくるんじゃないの。悟：そうかも。でももし今日うまく引けちゃったら？

隣華：そしたら、その勢いに乗って、付き合ってくださいって言えばいいんじゃないの (じゃないの)。

悟：そうだね。 『ごめん、愛してる』第1話

(27) みぎわ：でも、本当はその中の誰かかもしれませんわよ。

まる子：みぎわさんも花輪くんの彼女にしても
らえばいいじゃない（んじゃない）。

たまこ：今日さ、花輪くんの家に行ってみれば
いいじゃない（んじゃない）。

『恋するみぎわさん』

『まる子の大晦日』

(29) 徳永：さすが大塚さんだね、自分の担当事件
じゃないのに。

大塚：いいえ、僕は別に。

支部長：でも、まあ、竹村君もよくやったんじ
ゃないか。『正義のセ』第 5 話

(25) (26) における「のではないか」を「ではないか」に置き換えても、(27) における「ではないか」を「のではないか」に置き換えても、不自然な文にはならない。同じ場面であっても、「ではないか」と「のではないか」が話し手の発話意図によって選択的に使われている。つまり、「ではないか」と「のではないか」両者は全く独立で異質なものだとは言い切れない。確度の差によってそれぞれの役割が繋がっていて、発話意図に合わせて意味の可能性を広げているのではないかと考えられる。

次の 4 章と 5 章で「ではないか」と「のではないか」それぞれの意味がどのように広がっていくのかを見ていく。

4. 「のではないか」の意味機能とプロトタイプ

4.1. 「のではないか」の意味機能

「のではないか」構文は、話し手の前もっての見込みを表す「憶測」と、発話現場で何らかの根拠のもとに話し手の不確かな判断を表す「推量」という意味機能がよく観察される。例として、前者は例 (28) (29) (30) を、後者は例 (31) (32) (33) (34) を挙げる。

(28) (大晦日に、除夜の鐘を 108 回鳴らすのはなぜかについての話)

まる子：皆 108 個の煩惱あるかな。

父：あるんじゃないか。俺はとりあえずさっきの餅が食べたい、毎日お酒を飲みたい、タバコを吸いたい、お寿司食べたい……なあ、ちょっと考えるだけでも色々あるだろう。

(30) 部長（被疑者）：今取り下げたら、何もなかったことにして、名誉棄損で訴えることもしないし、お前は今まで通り会社にいられるぞ。

向井（被害者）：ですが……

部長（被疑者）：弁護士に相談したところ、私は証拠不十分で不起訴になるだろうって言ってたよ。お前にとって悪い話じゃないんじ
ゃないか。『正義のセ』第 5 話

以上の例はいずれも、「皆 108 個の煩惱がある」、「竹村君もよくやった」、「お前にとって悪い話じゃない」といった他人のことにに関して、個人の主観的認識を話し手がもともと想定していた点で、発話現場で与えられた根拠に基づいた「推量」と区別され、「憶測」を持つ文であると考えられる。

さて、日本語教科書で「推量」表現として「(よ)う」、「だろう」、「らしい」、「ようだ」、「そうだ」、「かもしれない」などがよく取り上げられているが、「(の)ではないか」構文はあまり見たことがない。実は、何らかの根拠に不確かなことを予想的に表現するために、「(の)ではないか」構文がよく使われているのである。（「推量」を表す「ではないか」構文については 5.1 で述べる）また、典型的な推量表現である「だろう（でしょう）」などに置き換えても意味はあまり変わらないし、推量を表す「きっと、恐らく、たぶん、もしかして、ことによると」などの陳述副詞との共起もしばしば見られる。したがって、このような「(の)ではないか」構文の意味機能を本稿では「推量」として扱うことにする。

- (31) 父：凛々子，お前のその融通利かないとこ，家族にとって面倒くさくてしょうがねえ。
娘：分かってます。
父：けど，検事という仕事には向いてんじゃねえか。しつこく諦めねえとこがさ。

『正義のセ』第1話

- (32) (午前中だということは，窓からさしている陽の角度でわかっている)「今，何時ですか？」
もしかすると数日が経ったのではないかと，恐れながら光子は尋ねた。(BCCWJ)

- (33) 税知識コラムのシリーズは，おそらく，京谷デスクが担当したのではないか。情報源の貴重さを，京谷は熟知していて，戦力の一人にしたのではないかと考えられた。(BCCWJ)

- (34) 玉子：まる子ちゃん，元気ないね，どうかしたの？
まる子：なんか今朝からだるいんだ。
玉子：本当？風邪ひいたんじゃないの。学校休めればいいのに。

『友蔵，これでいいのか考える』後編

(31) は娘がしつこくて諦めない性格から，「検事という仕事に向いている」と父が推測している。(32) は倒れていた光子が目覚めて，太陽の角度で「もしかすると数日が経った」と時間を推測する。(33) は「情報源の貴重さを，京谷は熟知している」ことから，「税知識コラムのシリーズはおそらく京谷デスクが担当する」と推量を行った。それぞれ「もしかすると」，「おそらく」という陳述副詞と呼応している。(34) は「今朝からだるい」という相手の体調に基づいて，「風邪をひいたんじゃないの」と推量に導いた。これらの例はいずれも何らかの気配或いは根拠をもとに推量を行うところに共通している。つまり発話現場である因果関係に基づいて推量を行うのである。この点において，話し手の前もっての見込みを表す「憶測」より確

度が高い。ただし因果関係があると言っても，あくまでも人間の思考上の問題であり，同じ根拠であっても人によって様々な結果が推量できるから，不確かさの表現である。

4.2. 対比と不確かさ

「無」を個別言語に依存しない否定のカテゴリーとすれば，否定のカテゴリーには，存在の無（～がない，no，没），出来事の無（いまだ～がない，not/never，没），関係の無（～でない，no，没），状態の無（もはや～でない，no longer，不再）がある（[宮本啓一，石飛道子，2003]）。これらの無の扱いの認知的種別からみると，「(の)でない」は基底の意味が関係の無を表し，そして終助詞「か」を付加させ，「関係の無の不確実性」を表すことが分かる。

一方，日本語の否定について，[日本語文法学会編，2014]（521 頁）は，日常言語における否定を「予想や希望のような肯定的な期待」に対して，それと対比的な現実を述べる場合であろう」と説明し，否定文の類型を図1のように示している。

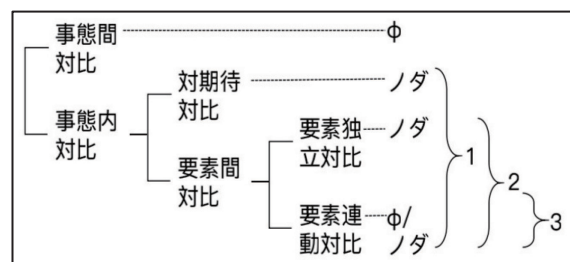


図1 否定文の四つの類型（521 頁から引用）

なお，図中の1は「期待との対比」，2は「前提あり」，3は「他要素を暗示」である。こうしたことから「関係の無」が日本語の否定にも適用できると言える。

本稿では，「の（だ）」の意味と関連させることから，上記の「期待に対する対比的な現実」，即ち「関係の無」を不確かさ（確からしさの否定）であると考え，「のではないか」構文のプロトタイプを検討していく。

4.3. 「の」の性質と「のではないか」のプロトタイプ

「(の) ではないか」構文のプロトタイプ的な意味を究明するには、各意味機能を明記するほか、「の」の性質も検討しなければならない。まず以下の例を見てみよう。

- (35) a. これでいい。 (作例)
b. これでいいのだ。 『天才バカボン』

- (36) a. (餌をやろうと犬小屋を覗いて) あれ、ポチ昼寝している。 名嶋 (2002)
b. (餌をやろうと犬小屋を覗いて) あれ、ポチ昼寝しているんだ。 名嶋 (2002)

(35) (36) の a 類は単に事態を描写しているのに対して、(35) (36) の b 類は「のだ」文の使用によって話し手の心的な態度が読み取れる。それぞれ「強調」「驚き」のようなニュアンスが味わえる。(35) b は『天才バカボン』の中のパパの名言である。通常 a のように「これでいい」だけで話し手の判断を表すことができるが、「の」を加えると話し手の言及した事態に関する特別な認識が入っている感じが出てくる。ここでは、「日々楽しく自由に生きるように、ありのままの自分を受け止めなさい」という意味が込められているように感じられる。(36) についても、a はただ「ポチが昼寝している」こと自体を言語化しているのに対して、b は「食事の時間だから、当然ポチが起きている」という前もっての想定と、目の前のこと (ポチが昼寝している) とのギャップに対して、話し手には「驚き」のような感じが生じて、「の」が入るわけである。つまり、「の」によって話し手が認識的に事態を把握したことがマークされているのである。

「のだ」文だけではなく、「のではないか」構文にも同じような現象が見られる。

- (37) (浜治さんたちを救うためにまる子が牛のうんこを踏んだ。その場にいた浜治さんとみぎわさんは、まる子のために牛のうんこを踏んだことを内緒にすると約束した。そして、学校帰りのバスで、やはりクラスメートたちが臭い匂いに気付いた)

クラスメート達：なあ、なんか臭くないか。

クラスメート達：本当だ、くせー。

まる子 (独白)：まずい、ちゃんと取ったんだけどなあ。

浜治：みぎわ、お前じゃないか。おならしたのは。

みぎわ：失礼だなあ、冗談じゃないわよ。

前田：(はまじに) そうだ、あなたなんじゃないの。

浜治：怖い。 (2015 376 話)

「あなたなんじゃないの」は何の根拠もなくただ個人の考えを述べているので、個人的な判断が強く、主観性がより高く感じられる。その分ある程度の攻撃性も帯びてくる。一方、「お前じゃないか」は主観的とは言え、発話内容の確度が前者より高い (逆に言えば話し手の主観性がより低い)。それは後ろに「おならしたのは」という臭いことの原因と考えられる解釈が付いているからである。つまり、主観的に判断したものを、あたかも客観的な事実として提示することによって、自分の意見を「客観的で正しい」ものとして相手に納得させるために、「ではないか」を使うのである。

私達はそもそもモダリティ表現を「用いる / 用いない」という選択のほか、用いるとしたら、どの程度のモダリティ表現を用いるのか、またそれを自分の主観的な意見として提示するか、客観的な事実として提示するか、という幾つかの選択肢がある。

上述までの分析から分かるように、「の」はまさに話し手が主観的に認識したことを提示する不確かさの表現である。それに基づき、関係の無を表す「で(は)ない」と不確実性を表す「か」を付加することによっ

て、「のではないか」のプロトタイプ的な意味は、3.1節で仮定したように、話し手の認識に基づいて起こる事態についての知識や、事態の生起を支持する証拠に対する信念の不確かさが概念化された表現であると考えられる。簡単に言えば不確かさの推量なのである。それを次の図2に示す。

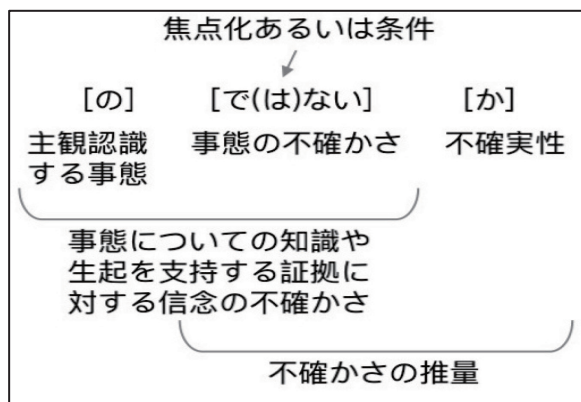


図2 「のではないか」のプロトタイプ

実は、不確かさの推量を表す「のではないか」構文に、「の」が大きな役割を担っているのである。「の」でマークされることが主観的に認識した事態なので、図3に示すように、ある原因・理由を前提とする結果があって、話し手自身の知識や信念に依存して原因・理由に遡る時間逆行の（確率的な）推論となる。潜在的な関係群から確からしい関係を選択するものである。そのうち話し手にとって最も確からしい原因・理由は「の」でマークされる。つまり結果に至る関係性

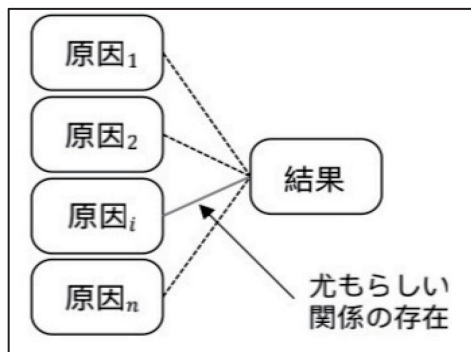


図3 原因・理由と結果との関係

があることを示す表現である。その対立は ϕ （形態がないこと）で、時間順行的に原因・理由から結果までという論理的な（決定論的な）推論方法である⁶。

5. 「ではないか」の意味機能とプロトタイプ

5.1. 「ではないか」の意味機能

「のではないか」構文と同じように、「ではないか」構文でも発話現場で何らかの根拠のもとに不確かな判断を表す「推量」の意味機能が観察される。

(38) 先生：私は淋しい人間ですが、 ことによると貴方も淋しい人間じゃないですか。私は淋しくって年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょう。動けるだけ動きたいのでしょう。動いて何かに打ちかけたいのでしょう…。

私：私はちっとも淋しくありません。

先生：若いうちほど淋しいものはありません。そんなら何故貴方はそう度々私の宅へ来るのですか。『ころ』

(39) …そろそろ日が傾きかけた頃になっても、妻が帰ってこない。なにしろ、人里を離れた山野の至るところで、虎狼の類いが我が物顔に跳梁していた時代のことである。ひょっとすると、その餌食になっているかもしれぬではないか。そこで、そそくさとやりかけの仕事をかたづけて裏山にわけいり、あちこち心あたりの場所を探しまわったあげく、最後にもしやと思って下ってみた沢のそばで、やっとまだ昏々と眠りこけている妻を見つけることができた…。

(BCCWJ)

(38) は、「度々私の宅へ来る」を拠り所にして「貴方も淋しい人間じゃないですか」と推量を行う。(39) は、虎狼などがのさばる時期に日も暮れたし、まだ帰ってこない妻が野獣に食べられてしまう可能性があ

ると表すため、「ではないか」を使って「推量」の意味を示す。

話し手側だけの認知から一歩進んで、聞き手まで認知できるはずと思われる事態について聞き手に確かめる場合に、「ではないか」構文は「確認」の意味機能として働く。(40)は、「お母さん新しい服ずっと買ってない」ということが母には当然知っているはずとまる子が推測したことを前提に、それを母に確かめるため「ではないか」が用いられるのである。

- (40) 娘：お母さん新しい服なんてずっと買ってない
 じゃない。いつも私達の服ばかり買って。
 母：でも同窓会に行くぐらいでわざわざ服を
 うなんて勿体ないよ。
 『お母さん、春のおしゃれをする』

さらに進んで、自分の推量結果を聞き手に確かめるのではなく、相手まで認められたい、或いは自分の願望や欲求を強く表す場合に、「ではないか」構文は「強調」の意味として使われている。(41)は妹を羨ましがらせるためわざと別荘の素晴らしさを強調するため、「ではないか」を使う。

- (41) (別荘に招かれた姉は家で1日過ごす妹に)「本
 物の暖炉まであるんだよ。素敵じゃない」
 『まる子、別荘への憧れ』

以上「ではないか」構文には発話現場である根拠のもとに行う「推量」、ある事態に関して共通認識のもとに相手に確かめる「確認」、その場で共通情報のもとに相手に認めてもらうよう強く主張する「強調」の意味機能が確認された。いずれも話し手が物についての知識や、存在を支持する証拠に対する信念の不確かさを表すところに共通している。不確かな表現であるが故に、「のではないか」構文と同じように、上昇調のイントネーションが一般的である。ただ話し手の主観認識をマーカーする「の」が脱落した点で「のではないか」を区別される。その分、主観認識の度合いは

「のではないか」より低く、確度はより高くなる。

ところで、推量する余地のない場合にも、イントネーションを変えながら「ではないか」文を使うことも観察された。知らなかった物事、現象、説明の仕方といった新情報を見つけ出した時の「発見」、その場で禁じ得ない感情や評価を表す「詠嘆」といった知識獲得の場合である。

- (42) (首を振って)「あ、まる子じゃないか」
 『バーゲン広告につけられる』

- (43) (中国人のお客さんを待っていた)
 服部：あなたは？
 黛：三木法律事務所の黛と申します。古美門先生ですね。
 服部：日本人じゃないか。いや、どうりで、日本語がお上手だと思いました。

『リーガル・ハイ』第1話

(42)は誰かの呼びかけで、首を振って、まる子の姿を見たという驚きを伴う発見である。(43)はやってきた相手が意外に日本語が非常に上手であることから、「日本人かなあ」と思っても、予約したのは中国人だと分かっているのをそれを認めがたい。最後に日本人の苗字を聞いて、「やっぱり日本人だ」という驚きの表現である。いずれも思いつかなかったこと或いは知らなかったことが、何かを機に発見され、新しい情報が導入されてしまった結果、「ではないか」をもって自分の驚きを表す。

そして、目の前のモノやコトなどについてそのまま客観的な記述ではなく、話し手の感情的な領域までさらに顕在すると、「詠嘆」の文になる。(44)は弁当を食へながら「最高」だと話し手が詠嘆を禁じ得ない。ある物事にその場での瞬間的な感情を覚えた時の感慨である。その場合に前に来る成分が体言ではなく、「最高」、「大手」、といったプラスの評価を帯びている情意的な表現が現れやすい。

(44) (弁当を食べながら)

「今年の弁当最高じゃない」

『ウチの夫は仕事ができない』第3話

(45) 友達：小林さんは今どんな仕事やってんの？

小林：イベント会社。マックスエンターテイメントっていう会社で働いたんだ。

友達：おっ、大手じゃないか。

『ウチの夫は仕事ができない』第10話

5.2. 「か」の二面性と「ではないか」のプロトタイプ

上述の分析から、「ではないか」の意味機能は、「発見」、「詠嘆」という不確かさなしのパターンと、「推量」、「確認」、「強調」という不確かさがあるゆえ推論を行うパターンに分けられていることが分かった。なぜこのような二面性があるのか。その答えは、終助詞「か」の「情意性」と「不確実性」に求めるべきであろう。

周知のように疑問表現には、ある疑念に対して主体自らその疑念の解消を目指す疑念解消志向の「疑い」と、相手に対して回答要求志向の「問い」がある。「(の)ではないか」構文は別に相手に何かを要求するわけではなく、話し手自ら何かの情報や判断を提示するものであるから、主体の内面にある不確かな「疑い」を表すものであると考えられる。その文末における終助詞「か」は「疑い」のマーカーであると言えよう。

しかし、「疑い」の終助詞「か」は不確かな疑念を表すことだけではない。[山口堯二, 1990]は、疑問表現には知的側面と情意的側面があると指摘した。仮に事態の不確かな捉え方が疑念の知的側面であるとすれば、そういう捉え方を容易に受け入れがたい主体の情意的ギャップともいえるべきものが、その疑念の情意的側面として相伴うという考えである。益岡氏も同じような考え方を示している。[益岡隆志, 2007]は「か」を不定性を表す助詞(標識)と見なし、認識面の不定性が前面に出る用法と、感情面の不定性が前面に出る

用法があると指摘し、認識系と感情系が連続すると示した。

「のではないか」構文を含め、前もつとの見込みを表す「憶測」、ある証拠のもとに推し量る「推量」、共通認識を持って相手に確かめる「確認」、相手に認められるよう強く主張する「強調」は、いずれも事態に対する不確かな捉え方であることから、「か」における「不確実性」に根ざしていると考えて良いだろう。この「不確実性」の元に、主体の予想を超える思いがけない事態が起こったり、与えられた事態を認めるに要する情意的ギャップが生じたりすると、「驚き」や「詠嘆」という「情意性」が前面に出る。

「不確実性」と「情意性」との繋がり、ただ疑問表現が「情意性」を運びやすいというあり方で認められるだけではない。終助詞の「か」のように、古代語で体言および活用語の連体形について驚きや詠嘆を表すことが目立ったことから、現代語で基本的に疑問表現として使うことまで転換したことがあったり、古代語の係り助詞「や」のように、本来詠嘆を主とする形式であったものが疑問形式としても用いられるようになったと推定されるものがあつたりするように、歴史的な変化から見ても、「不確実性」と「情意性」はそれぞれ独自の領域を持ちながら重なる点も多く、未分化なあり方である。

以下に、不確かさの推論の意味を表す「ではないか」構文のプロトタイプ①を図4に、事態の生起をそのまま受け入れる知識獲得の意味を表す「ではないか」構文のプロトタイプ②を図5に示す。

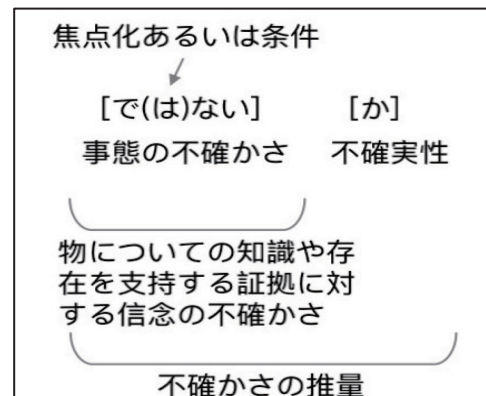


図4 「ではないか」のプロトタイプ①

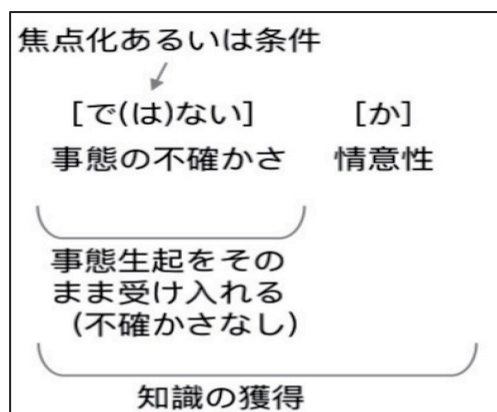


図5 「ではないか」のプロトタイプ②

5.3. 「ではないか」と「のではないか」の連続性のあり方

これまでの考察から分かるように、「ではないか」構文と「のではないか」構文のプロトタイプ的な意味は共に「不確かさの推量」である。その不確かさに、話し手の主観認識をマーカする「の」の有無によって、事態が起こる確からしさに対する信念の度合いに差が生み、両者に連続性が生じるのである。

一番不確かな、或いは主観認識が最も強い「憶測」から、少しずつ客観事実近づこうとするプロセスの中で、ある客観的な証拠のもとに推し量る「推量」、推論結果を共通認識として相手に確かめる「確認」、その推論結果を相手に認められるよう強く主張する「強調」までというように、不確かな推量が確度に依拠して連続する。このように「憶測」から「強調」までのプロセスで、確度が高くなり、話し手の主観認識の度合いが低くなるに沿って、「の」が脱落し、「のではないか」より「ではないか」構文のほうが使われやすくなる。一方、事態の確からしさに推論する余地がなく、知識獲得による内面の情意性の、ある物事を前に禁じ得ない「詠嘆」、目の前の「発見」という意味機能が「ではないか」文にも現れる。

事態が起こる確からしさという確度を基準に「のではないか」と「ではないか」構文の連続性を、以下の図6にまとめた。

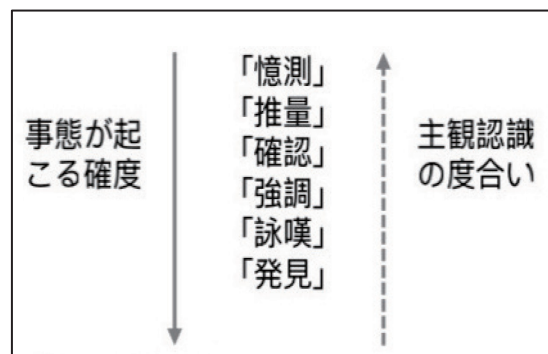


図6 「ではないか」と「のではないか」の連続性

「ではないか」と「のではないか」との使い分けを認知論的な観点からまとめると、次の表1になる。

プロトタイプ	表現形式	推論	認知行為	意味機能	確度
不確かさの推量	のではないか	あり	時間逆行の推論	憶測推量	↓
	ではないか		時間順行の推論	推量確認強調	
知識獲得	ではないか	なし	推論なし	詠嘆発見	

表1 使い分けの要因と意味機能

繰り返しになるが、不確かさには二元性がある。一つは「の」に代表される信念の度合い(認知論的なもの)で、もう一つはφ(形態がないこと)で表す偶然に依拠するものである。つまり「の」の有無は、事態を主観認識するか否かであり、それは推論という認知行為の違いに結びついている。図3に示したように、一つはある結果を前提に、その「原因・理由」に遡る時間逆行的な推論である。もう一つは、ある「原因・理由」のもとに、それなりの「結果」を導く時間順行的な推論である。前者は「ののではないか」文、後者は「ではないか」文における話し手の認知行為あるいは推論方

法である。この認知行為の違いによって、当然事態が起こる確からしさの程度、つまり確度に差が出て、「のではないか」と「ではないか」との連続的な推移も明らかになってきた。また、不確かさの推量がなく、発話現場での知識獲得であっても、「ではないか」を使うことができる。表現上分化していないけれども、認知要因は違っている。その違いは「か」の二面性によるものであると考えられる。

従って、最初にあげた(1)のように同じ言葉である「今」に「ではないか」と「のではないか」両方が後続できることと、(2)のように同じ場面で両方が使えることは不思議ではない。共に不確かさの推量でありながらも、主体の認知行為の違いによる確度の差があるのである。そして、疑いのない確度においても「ではないか」を使うことの未弁別の特徴が、(3)の現象を説明している。

6. 終わりに

6.1. 結論

以上言語中立的な概念—「事態が起こる確度（不確かさ）」の二元性や、「推論の有無」で「ではないか」と「のではないか」との使い分けの合理的な説明ができたと考える。事態が起こる確度は、確率論において従来から二元性が指摘されており、そのうち、いわゆる「ある事実について個人の知識やその事実を支持する証拠にたいする信念の度合い」を叙述する際に、日本語においては認識事態を表す「の」でマークすることを指摘した上、次の結論を得た。

第一に、「ではないか」と「のではないか」は明快な二分関係ではなく、確度の差による連続的な推移関係である。「不確かさの推量」をプロトタイプの意味として、「のではないか」は主観認識する事態を対象として確度が低い不確かさを叙述しようとする。「で

はないか」は物についての知識や存在を支持する証拠に対する信念の不確かさ、即ち客観的な物や存在を依拠した推量で、確度がより高い不確かさを表現しようとする。具体的には、発話場面や発話意図に合わせて、前もっての個人的な見込みを表す「憶測」、不確定な物事を推し量る「推量」といった不確かな意味機能が生じる。事態が起こる確度が徐々に上がっていくことに従って、主観認識を表す「の」が脱落し、共通認識を持って聞き手に確かめる「確認」、相手に認められるよう強く主張する「強調」にまで意味機能が広がっている。

第二に、「不確実性」と「情意性」が相伴う「か」の未分化的特徴により、事態の生起をそのまま受けられる叙述において、「ではないか」は知識獲得の表現に変わる。「か」という疑問の形態を使っているが、不確かさが陰に隠れて情意性が正面に出ている結果、禁じ得ない「詠嘆」、目の前の「発見」や驚きといった知識獲得の意味機能が生じる。

日本語教育の観点から、個別言語に依存しない、より一般化された用語で表すことが必要であることを主張し、上記の結論に達した。

6.2. 今後の課題

「の」の有無によって、上接する事態の命題内容が持つ確度に差が生じることの背後にある表現類型（述語のタイプや述語がとる補語の種類など）の解明がある。また、中国語母語話者として、日本語の「の（だ）」に対応する中国語の表現（“（是）…的”など）にも目を移し、翻訳としての対応だけでなく、本稿で示した言語中立的な概念語—「不確かさ」や「推論の有無」、「推論方法」を用いて中国語表現を分析し、表象の表現分布の対比を行いたい。

注

- 1 一言で「ではないか」、「のではないか」と言っても、実は形態上多くのバリエーションがある。本稿は話し言葉と書き言葉を分けず、丁寧さやイントネーションなどによる違いを含め、研究対象として扱う。「ではないか」をはじめ、砕けた言い方で男性は「じゃないか」、「じゃん↑」、女性は「じゃない↑」などを使う。丁寧形は「ではありませんか」、「ではないですか」となる。「のではないか」をはじめ、くだけた言い方で男性は「んじゃないか」、女性は「んじゃないの↑」、「んじゃない↑」を使う。丁寧形は「のではないですか」、「のではないませんか」となる。便宜上、「ではないか」と「のではないか」両者を一緒に挙げる時、「(の) ではないか」で代表させたい。
- 2 「分析的」とはある事象をその構成要素に即して考察するものである。「分析的な否定疑問文」は単純に命題内容の肯定や否定関与するものである。これに対して、「非分析的な否定疑問文」は、否定辞を含む疑問文であっても、否定でも疑問でもなく、「促し」「推定」「気候」などの意味を表すようなタイプの疑問文であり、「誘導型否定疑問文」とも呼ばれる。「肯定の答えを予測する」(久野 1973)、「肯定の傾きをする」(仁田 1991)と言われる否定疑問文はこのタイプに属する。
- 3 田野村(1988)における「ではないか1」は本稿の「ではないか」構文に近いもので、「ではないか2」は本稿の「のではないか」構文に近いものであると考えられる。「ではないか3」は分析な表現なので、本稿とは関係のないものである。
- 4 スコープの「の(だ)」文は名詞文と共通した性質を持っていることを断っている。(野田:P31)
- 5 安達(1999)は「傾き」と呼んだ。本稿は言語中立的な概念語で説明するため、「傾き」という呼び方を避けて、「憶測」にした。「傾き」とは命題の真偽を聞き手に問いかける時、話し手がどちらかの値への見込みが存在することである(P52)。対話現場での推論によって得られた見込みは「傾き」とはなり得ない(P73)。(この点で、対話現場で何かを証拠に行われる「推量」と区別される。
- 6 三上章(1972)が提案した「反省時」と「単純時」に近いものとも言える。ノダの機能は、「テンスばかりではなく、ムード的なもの、アスペクト的なものに渡っている」と三上章は断っている。「何々スル・シタ」を単純時、「スル・シタ+のデアル・のデアッタ」を反省時と呼び対立させた上で、次のように両者の違いを説明している。
 単純時は報告であって、センテンスの一つ一つが独立して使われ、順々に言い続けられているが、反省時による解説は文脈の解説を目指すものだから、何らかの場合を前提として使われるものである。つまり前文と関係的に出てくるものであって、その続き具合は順ではなく「逆」である。

注

1. ドラマ：
 - 『リーガル・ハイ』フジテレビ 2012
 - 『5時から9時まで私に恋したお坊さん』フジテレビ 2015
 - 『ウチの夫は仕事ができない』日本テレビ 2017
 - 『ごめん、愛してる』TBS テレビ 2017
 - 『正義のセ』日本テレビ 2018
2. アニメ：
 - 『ちびまる子ちゃん』フジテレビ 芝山努・須田裕美子監督 [(バーゲン広告につけられる), (夏休みの登校), (恐怖のエレベーター), (お母さん、春のお洒落をする), (友蔵、これでいいのか考える), (まる子、別荘への憧れ), (みぎわの犬), (恋するみぎわさん), (まる子の大晦日), (まる子、偏食をする), (七夕祭りの商店街), (2015 381 382 話), (2015 375 376 話), (巴川の花火大会), (不幸の手紙), (まる子ちゃん賞状をもらう)といった巻]
 - (以上のドラマとアニメから聞き取った用例 26 個を日本語母語話者 4 人にチェックしてもらった)
3. 教科書：《総合日本語》第二冊修订版 总主编彭广陆 守屋三千代 北京大学出版社
 新版《中日交流标准日本语》初级下 人民教育出版社
4. 漫画：『復刻版天才バカボン 1』赤塚不二夫(講談社コミックス 二七五五巻) 1999 年 10 月 15 日第 1 刷発行

5. 小説：『こころ』（夏目漱石 / 著 新潮文庫）
6. 使用データベース：中納言コーパス現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ-NT (<https://chunagon.ninjal.ac.jp> アクセス日時 2020 年 8 月 21 日)
7. 使用ツール：<https://www.sakigake.jp/news/article/20200716AK0001/>（アクセス日時 2020 年 8 月 2 日）
<https://www.bb-navi.com/cm-douga/CMkubotamasataka.63115.html>（アクセス日時 2020 年 2 月 2 日）
<https://tabelog.com/mie/A2403/A240303/24005468/dtlrvwlst/B258125776/>（アクセス日時 2020 年 2 月 2 日）
https://www.taharakankou.gr.jp/ufire/library/1220_file.pdf（アクセス日時 2020 年 2 月 2 日）
<https://nana-music.com/songs/13412>（アクセス日時 2020 年 2 月 2 日）
<https://nomdh.com/higanbana/>（アクセス日時 2020 年 2 月 2 日）

参考文献

- 三上章. (1972). 現代語法序説. くろしお.
- 三上章. (1953). 現代語法序説—シンタックスの試み—. 刀江書院.
- 久野暉. (1973). 日本文法研究. 大修館書店.
- 庵功雄. (2013). 『のだ』の教え方に関する一試案. 言語文化, 50, 頁 3-15.
- 井上優. (1994). いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって. 国立国語研究所報告集 (15), 頁 207-249.
- 範夢婕. (2015). 中国母語話者の否定疑問の習得に関する基礎研究—「(ン) ジャナイカ」の表現機能に注目して—. 北京外国語大学修士論文.
- 戴宝玉. (2015). 关于表示推测的「ではないか」と「のではないか」. 日语学习与研究 (2), 頁 44-52.
- 野田春美. (1997). 「のだ」の機能. くろしお出版.
- 益岡隆志. (1991). モダリティの文法. くろしお出版.
- 益岡隆志. (2007). 日本語モダリティ探究. くろしお出版.
- 早川知江. (2012). 日本語のモダリティ：『主観的』表現と『客観的』表現. 名古屋芸術大学研究紀要 (33), 頁 285-301.
- 安達太郎. (1999). 否定における判断の諸相. くろしお出版.
- 安田崇裕. (2014). ノダ系の諸表現の包括的記述. 北海道大学文学研究科研究論集, 14, 頁 103-123.
- 山口堯二. (1990). 日本語疑問表現通史. 明治書院.
- 中田一志. (2017). 談話における否定疑問文の二つの機能. 日本語・日本語文化 (44), 頁 1-29.
- 名嶋義直. (2002). 『既定性』を中心としたノダ文分析の限界. 言葉と文化, 3, 頁 91-109.
- 名嶋義直. (2007). ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—. くろしお出版.
- 楠本徹也. (1999). ノダ文におけるノの認知作用に関する一考察. 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 (25), 頁 99-109.
- 家村伸子. (1997). 中国語母語話者の否定疑問文習得に関する基礎的研究. 広島大学日本語教育学科紀要, 7, 頁 81-88.
- 家村伸子. (1994). 日本語否定疑問文の運用能力に関する研究—話し手の不確かさを表す否定疑問文の運用能力調査を中心に—. 広島大学日本語教育学科紀要, 4, 頁 25-32.
- 宮崎和人. (2001). 認識的モダリティとしての〈疑い〉—『ダロウカ』と『ノデハナイカ』—. 国語学, 52 (3), 頁 15-29.
- 蓮沼昭子. (1993). 日本語の談話マーカー『だろう』と『じゃないか』の機能—共通認識喚起の用法を中心に—. 小出記念日本語教育研究論文集 (1), 頁 39-57.
- 池上嘉彦. (2011). 日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉. 人工知能学会誌, 26 (4), 頁 317-322.
- 井原奉明. (2017). Langacker による主観性に関する視点構図への批判的検討. 学苑・英語コミュニケーション紀要 (918), 頁 100-119.
- 田野村忠温. (1988). 否定疑問文小考 (巻 152). 国語学.
- 田野村忠温. (1990). 現代日本語の文法 I —「のだ」の意味と用法. 和泉選書.

- 日本語文法学会編. (2014). 日本語文法事典. 大修館書店.
- 宮本啓一, 石飛道子. (2003). ビックリ! インド人の頭の中—超論理思考を読む. 講談社.
- エリオット・ソーバー著, 松王政浩訳. (2012). 科学と証拠. 名古屋大学出版会.
- イアン・ハッキング著, 広田すみれ・元良太訳. (2013). 確率の出現. 慶応義塾大学出版会.
- S. I. ハヤカワ著, 大久保忠利訳. (1985). 思考と行動における言語. 岩波書店.
- W. O. クワイン著, 杖下隆英訳. (1972). 現代論理入門. 大修館書店.